T2R2 東京工業大学リサーチリポジトリ
Tokyo Tech Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	巻頭言 査読の厳しさにもめげず
著者(和文)	仁科喜久子
出典(和文)	専門日本語教育研究 第１１号, , No. 11, pp. 1-2
発行日 / Pub. date	2009, 12
URL	https://www.jstage.jst.go.jp/article/jtje/11/0/11_0_01/_pdf
Note	当論文は出版社版です。論文をJ-STAGEにて併載いたします。

Powered by T2R2 (Tokyo Institute Research Repository)

巻頭言

査読の厳しさにもめげず

専門日本語教育学会長

仁科　喜久子

東京工業大学・留学生センター　教授

「専門日本語教育学会」も11年目を迎えました。過去10年を振り返っても、留学生教育に関連する政策や研究はめまぐるしく変化してきました。本学会も2010年の研究討論会では、「アジア人財」に関連するシンポジウムを計画しています。さまざまな留学生施策の中で、我々は留学生に対してどのような日本語教育が可能か、また何をどう教育すべきか、教育を実現させるためにどのような研究すべきかを考えてきました。11号の誌面に収録された論文はその成果といってよいでしょう。現時点では、会員160名の学会ですから、まだまだ小さい学会です。今後専門日本語教育学会が目指すべき方向性を探るために、学会の中で非常に大きい重みをもっている学会誌について述べることにします。

学会誌は残念ながら年に一回しか発行されませんが、編集委員会は厳しいが親切なことで定評を得ているようです。ホームページも徐々に充実し、原稿の書式、投稿の諸手続きの説明を整えてきました。投稿者は留学生教育に関連する職にある方、大学院生が多いようです。編集委員会は厳密な査読をし、その結果を投稿者に伝え、多くの投稿者は誠実にそれに応えて、論文の内容を磨き上げていくという対話を行い、発行にたどり着いています。この投稿から採択までの手続について各学会で少しずつ異なることもありますが、投稿者が修正し、再投稿する原稿に回答書をつけることなどはどの学会でも同じだと思います。

我々の学会は、いわば学際的領域の集まりです。日本語教育関係者、言語研究者が多いものの、理工学系や社会科学系の研究者も含まれます。研究の手法について、「文系」分野では、個人単位の研究が中心で、著作物も単著が多いと思います。一方、工学系などの「理系」分野では、共同で研究開発をすることが多く、共著での論文執筆が多いと思います。共同作業の多い「理系」の場合は、論文作成から投稿の過程も、指導教員、先輩を研究の場で直に見ながら学ぶことが多いと思われます。一方、「文系」の場合は、資料を読み解くのも、論文にまとめるのも独りということが多く、研究の現場で仲間から学ぶ情報が少ないと想像されます。

本学会では日本語学習者が論文やレポートを書く支援のための研究論文も多数投稿されますが、日本国内では、高等学校などでの論理的な文章の書き方の授業はあまりないと思います。また、先に述べたように共同の現場から学ぶ機会が少ない人々は、論文作成をどのようにして体得したのでしょうか。論文作成マニュアル本を読む人もいると思いますが、それを読んでも書いても、投稿して採択に至るまでに乗り越える必要のある全ての課題には対処できない人が多いと思います。

一つの方法は、実際に投稿して査読を受けることだと思います。投稿しても不採択ということもありますが、そこに書かれたコメントから、計画を立て直すことができます。条件付き採択や再投稿という結果が来ると、自分では気付かなかった問題点に気づくことができます。また、要求されることは、その通りと納得できるかもしれないが、解決できそうもない問題であることもあります。そこで、どのようにしてその難問を克服するかを懸命に考えるでしょう。参考文献を読んだり、データを再チェックしたり、分析の視点を変えたりして考えても、答えがでないとため息もでることもあると思います。共同研究なら仲間と一緒に議論して、再分析した結論を出し、それをふまえて回答書を作成することになります。再投稿の場合は、この結果に対して、さらに査読を受け、

前回よりの改善点への評価と再検討の要請を受け、さらに新たな分析、先行研究の参照などを加えて検討を進めることで、研究は進展するはずです。

このような査読者とのやり取りを通して採択されたときは、投稿者たちは、多くを学んでいるはずです。研究者が体験して得たことは、学生や研究者の卵に対する指導に反映させることができます。

専門日本語教育学会誌は年に一回しかありませんが、これも年に一回の研究討論会と併せて、この機会を利用していただきたいと存じます。編集委員一人一人は一人でも多くの方の投稿が論文として掲載されることを祈りながら、査読編集作業に邁進しています。学会運営側としては、会員の皆様が投稿しやすいような案内やマニュアルの充実に努めなければならないと考えています。来年の巻頭言に投稿数の多さにうれしい悲鳴を上げたことを書き記すことを夢見て、この記事を終わることとします。